

ドリームチーム「Team OSAKA」の Vision が世界大会へ

あさの じゅんや
浅野 純也(ライター)

ロボカップジャパンオープン2004のヒューマノイドリーグで高いパフォーマンスを披露、そのポテンシャルの高さを見せつけ、見事総合優勝を果たしたVision。05年のロボカップ世界大会が大阪で開催されると決まった直後、地元大阪チームの活躍を目指して結成されたドリームチーム「Team OSAKA」が開発したロボットだ。大阪市はRT = Robot Technologyを都市再生の重要産業と位置付けており、梅田駅に隣接した地区に関連企業を集積するロボシティ・コア構想を推し進めており、Team OSAKAにはそんな行政の取り組みをアピールする役割も持たされている。



腕立て伏せや仰向けに寝た状態で上半身をひねったりと、運動性能の高さはOmniHead譲り。外装が妨げになっていない。

Team OSAKAは公募によって募集。14企業3大学4研究室1NPOの中から選ばれたのがヴイストーン・阪大大学院石黒研究室・ロボガレージ・システクアカザワの合同チームだ。石黒研はロボットだけでなくセンサーネットワークなどの研究で知られる石黒浩教授の研究室。ヴイストーンはOmniHead = ROBOVIE-Mで知られる開発ベンチャーで、もともとは石黒教授が開発した全方位カメラの事業化のために設立された会社。システクアカザワは戦前からの機械加工メーカー。ロボガレージは足裏磁石で歩行するmagdanの開発で知られるロボットデザイナー高橋智隆

氏の会社だ。

もともとはヴイストンの前田武志氏がROBO-ONEのために開発したOmniHeadがきっかけ。まだ完成していない時点ではあったが、ドリームチームの公募を知り、応募をしたのだという。ヴイストーンと石黒研の関係はすでに記した通り。システクアカザワはヴイストーンに出資しており、全方位カメラの製造を請け負っていたという経緯があった。ロボガレージはATRのROBOVIE-Rのデザインに関わったことで石黒研やヴイストーンと関係ができ、ロボットの外装にもこだわりたいということで参加が決まった。まとめ役にはシステクアカ

ザワの赤澤社長があたった。



Vision開発ルーム。ヴイストーンと同じ建物内にあり、写真では見えないがソファベッドが置かれており完全泊まり込み装備済み。